

終末期がん患者と家族の療養の場に関する意思決定支援の文献検討

○鎌谷 海咲（社会医療法人三栄会ツカザキ病院）、中田 実結（津山中央病院）

堀 理江（関西福祉大学看護学部）

I. はじめに

がんは我が国において昭和 56 年より死因の第 1 位で、現在では年間 30 万人以上ががんで亡くなっており、がんの死亡者数・罹患者数共に増加傾向である。終末期がん患者・家族の意思決定においては、何が最善か分からないという倫理的価値の対立に直面する。そこで、本研究では終末期にあるがん患者・家族の療養の場について意思決定支援を行う看護師の現状を文献検討により明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. データ収集方法：医学中央雑誌 Web 版を使用し、検索年数は過去 15 年分とし、会議録を除いた。「ターミナル」「看護師」「療養場所」「意思決定支援」「ターミナル」「看護師」「アドバンスケアプランニング」「療養場所」を組み合わせた 21 件を抽出、そのうち重複する文献を除き、「対象が終末期がん患者」また「ACP（Advance Care Planning：以下「ACP」）のプロセスや役割について記されていること」に該当する文献 7 件を分析対象とした。ハンドサーチで得た文献 1 件を加え、計 8 件を分析対象とした。

2. 分析方法：量的研究は研究結果をまとめた。質的研究は、研究目的に合致する記述を抽出し対象文献から得た結果をコードとし、類似するコードをまとめてカテゴリを生成した。

III. 結果

1. 量的研究結果：看護師の ACP 支援として最も平均値が高かった項目は「患者が終末期をどこで過ごしたいと望んでいるのかを理解する」、低かった項目は「患者の今後のことについて意向を記録する専用の用紙や様式を使用する」であった。患者の最終的な希望死亡場所は自宅 60.4%、病院 20.3%、施設 1.6%、患者の死亡場所は自宅 65.0%、病院 33.4%、施設 1.6%であった。最終的な希望死亡場所での死亡が実現した患者は 73.8%であった。

2. 質的研究結果：終末期にある患者・家族の療養の場についての意思決定支援として「患者が希望を持ち続けるための支援」「確実に情報共有できる体制づくり」「看護師と患者・家族との信頼関係の構築」「患者と家族との橋渡し」「患者と家族との意見の相違の調整」「患者の意思決定能力があるうちに行う ACP のきっかけづくり」「ACP における患者と家族の価値観の理解」の 7 カテゴリが明らかとなった。また、意思決定支援時の看護師は「死について患者と話を進める上での戸惑い」「看護師の意思決定支援についての知識の不足」「看護師が患者・家族の思いの変化に対応する困難感」を感じていることが分かった。

IV. 考察

ACP 実施にあたっては、情報共有できる体制や信頼関係の構築など、コミュニケーションが必要であることが明らかになった。ACP を実施する上で看護師は戸惑いや困難感などの陰性感情を抱いており、これらを少しでも軽減するために振り返る場を設けることでより良い ACP を実現できると考える。がん患者は増加傾向であり、ACP の受容は一層高まることが考えられたため、今後は、患者や家族の視点での ACP の実態を明確にしていく必要がある。